

令和7年度年次報告

課題番号 : NGT_01

(1) 実施機関名 :

新潟大学

(2) 研究課題（または観測項目）名 :

（和文）日本海沿岸地域を中心とした地震・火山噴火関連災害の解明のための史料収集と解析

（英文）Collection and analysis of historical documents for clarification of disasters related to earthquakes and volcanic eruptions on the coast of the Sea of Japan

(3) 関連の深い建議の項目 :

1 地震・火山現象の解明のための研究

- (1) 史料・考古・地形・地質データ等の収集と解析・統合
 - ア. 史料の収集・分析とデータベース化

(4) その他関連する建議の項目 :

1 地震・火山現象の解明のための研究

- (2) 低頻度かつ大規模な地震・火山噴火現象の解明
 - 地震
 - 火山

2 地震・火山噴火の予測のための研究

- (1) 地震発生の新たな長期予測（重点研究）
 - イ. 内陸地震の長期予測

5 分野横断で取り組む地震・火山噴火に関する総合的研究

- (4) 内陸で発生する被害地震

(5) 本課題の5か年の到達目標 :

1.日本海沿岸を中心とした地震・火山現象に関する史料を各地の文書館・図書館等の史料保存機関で調査・収集し,新たな史料については翻刻・分析を行い,データベースの構築につとめる.2.史料の収集・分析にあたっては,災害発生前後の環境・地形・天候などにも意識を拡げ,地震・火山噴火が複合・連鎖する災害（積雪,融雪,降水などに伴う地すべりや洪水など）の発生メカニズムの解明に貢献する.3.従来重視されることの少なかった年代記や絵図,一枚摺などの史料にも注目し,地震・火山等の歴史災害研究に必要な新たな災害史料学の展開を試みる.4.これまでの研究で実施してきた事例の中から,日本海沿岸地域を中心とした地震関連災害の解明を重点的に行う.とくに日本海沿岸地域は冬期の積雪が多いことから,地震災害と積雪との複合災害について研究を推進する.5.収集・分析した史料に基づき,日本海沿岸地域で発生した内陸地震の震度分布図を作成する.また,震度分布図の作成に用いた史料・位置・震度などの各種データを活用し,内陸地震の規模や震央を再検討して内陸地震の長期予測に寄与する.6.同じ研究対象を歴史学・考古学・地理学の研究者等が共同で研究を行うことにより,地震・火山等災害研究において異なる学問分野の研究者が連携することの重要性を明示する.

(6) 本課題の5か年計画の概要 :

期間を通じて,日本海沿岸を中心とした地震・火山現象に関する史料を各地の文書館・図書館等の史料保存機関で調査・収集し,新たな史料については翻刻を行う.また,歴史学・考古学・地理学の研究者が参加する研究会を開催し,各研究者が同じ研究対象を共同で研究する.令和6~9年度は,収集した史料を分析し,地震・火山等の災害記録として活用できるデータを抽出する.近代的な観測データとの比較・検討が可能となる総家数・倒壊家屋数・即死者数等が記載される良質な史料については被害表等を作

成する。収集した災害関連の絵図については、絵図記載の文字の翻刻・トレース図の作成を行う。地震・火山噴火が複合・連鎖する災害（積雪、融雪、降水などに伴う地すべり・洪水など）の発生前後を知りうる史料についてはその推移を明示する。令和10年度は、年代記や絵図、一枚摺などを地震・火山等の歴史災害研究に活用する方法を提示する。また、過去の地震・火山等による複合災害・連鎖災害の発生メカニズムのモデルケースを提示する。そして、歴史学・考古学・地理学研究者等が共同で研究してきた成果を吟味し、異なる学問分野の研究者等の連携研究の方法を明らかにする。

(7) 令和7年度の成果の概要：

・ 今年度の成果の概要

今年度（令和7年度）の成果の概要：主な成果は以下のとおりである。

1.日本海沿岸地域を中心とした地震・火山現象を解明するため、各地の史料保存機関に所蔵される史料の調査と分析、既刊の地震・火山噴火史料集に所収される史料の原本調査に基づく校訂作業を実施した。

(1) 1670年越後蒲原地震に関する史料の調査・分析

寛文10年5月5日（1670年6月22日）の地震について、30日余大地震があったと記される年代記『横越島旧事記』は越後国蒲原郡横越村に残る史料に基づいた記録であり信頼できることを明らかにした。また新発田藩の「御記録」の記事「五月五日 新発田大地震」は城下町新発田もしくは新発田藩領のどこかで大揺れがあったことを記録したものであること、『中蒲原郡誌』に記された「旧記」がいかなる史料なのかを確定することなしに記載された地震記事を使うことはできないことを明確にした。

(2) 近世佐渡の記録・年代記の調査・分析

近世の佐渡の『佐渡国略記』（舟崎文庫）を史料学的に検討し、同書は相川町年寄の伊藤三右衛門3代にわたって記された同時代史料であることを確認し、享保11年（1726）～文化7年（1810）の42件の地震関連記事の内容は信頼できることを明らかにした。近世末期成立の『佐渡年代記』の地震関連記事の多くは『佐渡国略記』の記事を典拠にした可能性が高いとした。

(3) 1779年佐渡の地震津波の有無の検討

安永8年11月10日（1779年12月17日）夜に佐渡、越後長岡、会津只見、江戸で大地震（強地震）とされる地震は、従来『佐渡年代記』に翌朝「登龍」によって大間町・濁川の町家が破損したという記事があることから、津波をともなう被害地震とされた。しかし、『佐渡年代記』が典拠とした『佐渡国略記』では地震とは別の箇条に「龍上り」と記されること、他の「龍上り」の記事は大風に関する現象と考えられることから、他地域の事例をふまえても「登龍」「龍上り」は地震津波でなく竜巻のことであることを明らかにした。

(4) 1828年越後三条地震への村上藩の対応に関する検討

文政11年（1828）越後三条地震について村上城下（新潟県村上市）の年行事所日記等の史料を分析し、当時の村上藩は被災地救済金を城付領の豪農商に頼らざるを得ない状況であったこと、この三条地震は蒲原郡味方村（新潟市西蒲区）の窮民が村上城下まで流入する状況を引き起こしたこと、夏の水害による凶作に重ねて発生した複合災害であったことを明らかにした。

(5) 1894年10月22日庄内地震の史料収集・分析

新潟県中蒲原郡女池村大字小張木（新潟市中央区）の逢坂類治の日記（新潟大学附属図書館所蔵）に記される明治27年（1894）10月22日の庄内地震記事の翻刻を行い、地震発生の午後5時50分から6時40分まで（史料のママ）5回の微震があったことを明らかにした。

(6) 新潟測候所の1922～1926年「管内地震報告」の調査・分析

新潟測候所の「管内地震報告」控を一冊に綴じた1922～1926年の『管内地震報告』自大正十一年至大正十五年』所収の十日町森林測候所の地震観測情報と「月表原簿」の地震観測情報とを比較検討した。「月表原簿」の地震観測記録は「管内地震報告」に比して情報量は少ないが、地震の観測時刻の相異や「管内地震報告」には見られない独自の観測情報が含まれ、「管内地震報告」の地震観測情報の検討・補強に必要な資料として位置づけられることを確認した。

2. 考古学および地形・地質の調査

(1) 弥生時代における三陸地震津波の考古学的研究

弥生時代中期初頭（2300calBP）に仙台湾周辺で観察される集落の一斉衰退が災害に起因するものかについて分析した結果、前期末に営まれる大規模な集落が中期初頭に衰退し、短い中断を挟んで新たな集落が出現することを明らかにした。その際に仙台平野の水稻耕作が導入された可能性を指摘した。また、仙台湾岸の貝塚形成においても中断を挟むことから、この一斉衰退現象が津波に起因する可能性があ

り,箕浦幸治 (2014) が指摘した弥生時代中期の津波の回数と整合する。

(2) 津軽平野中部における完新世の堆積環境の変化と地形変遷

津軽平野中部においてボーリングコアの解析をもとに完新世の堆積環境の変化を検討した結果, 泥層・砂層・軽石層の堆積を繰り返し上方累重したことが確認された. 上位沖積面に分布する自然堤防群の大半は, 十和田火山AD915噴火後の過剰物質供給時に形成された可能性があり, 沼澤原における上位沖積面と下位面の分化は, 同噴火後の過剰物質供給の収束に応答して河川の下刻が生じたことに起因すると考えられるとした.

3. 歴史学・考古学・地理学研究者が参加する研究会の開催

(1) 第13回歴史地震史料研究会の開催

2025年11月23日に第13回歴史地震史料研究会をオンラインにて開催し, 本課題研究者メンバーを中心とした歴史学者8人・考古学者1人・地震学者1人による研究発表・討議を行った (参加者44人).

(2) 『災害・復興と資料』17号・18号の刊行

2025年3月, 主として共同研究メンバーの昨年度の成果を発表する『災害・復興と資料』17号を刊行した. 今年度の成果は2026年3月刊行する18号に掲載予定である.

- ・「関連の深い建議の項目」の目的達成への貢献の状況と、「災害の軽減に貢献する」という目標に対する当該研究成果の位置づけと今後の展望

今年度は各地の史料保存機関に所蔵される史資料等の調査を行い, 1670年越後蒲原地震, 18~19世紀初め佐渡の地震, 1828年越後三条地震, 1894年10月22日庄内地震について, 既刊の地震関連史料集収載のうち重要な史料を調査し校訂するとともに, 既刊史料集に未収載の史資料を新たに収集・分析した. そして1779年佐渡地震の津波はなかったことを明らかにするなど, それぞれの新たな地震像を提示した. また, 仙台湾周辺遺跡の考古学的な分析により, 弥生時代中期初頭に集落を衰退させる地震津波があった可能性を指摘した.

今年度に分析した史資料には, 従来重視されることの少なかった年代記や絵図も含まれており, 研究課題の目標の一つに掲げた新たな災害史料学に必要な素材を得ることができた. これらの成果は, 研究計画のうち「関連の深い建議の項目」の1. (1) ア. 史料の収集とデータベース化に十分寄与できると考えられる. 次年度以降も新たな地震・火山関連の史資料等の収集・調査・分析を進め, 今後の災害被害の予測をはじめ災害の軽減に貢献したい.

(8) 令和7年度の成果に関連の深いもので、令和7年度に公表された主な成果物（論文・報告書等）：

- ・論文・報告書等

小野映介・小岩直人・柴 正敏・高橋未央・佐藤善輝, 2025, 津軽平野中部における完新世の堆積環境の変化と地形変遷, 地理学評論, 98(3), 146-161., 査読有, 謝辞無

片桐昭彦, 2025, 『常光寺王代記并年代記』の康安元年地震記事, 災害・復興と資料, 17, 1-8., 査読有, 謝辞有

片桐昭彦, 2025, 近世佐渡の年代記と地震, 第13回歴史地震史料研究会講演要旨集, 15-18., 査読無, 謝辞有

片桐昭彦, 2026, 安永八年十一月佐渡の「登龍」は地震津波か, 新潟史学, 90, 49-56., 査読有, 謝辞有

斎藤瑞穂・鈴木正博, 2025, 仙台湾弥生土器編年と地震津波研究—仙台湾最古の水田経営と松島湾の繩文／弥生貝塚形成論—, 第13回歴史地震史料研究会講演要旨集, 1-4., 査読無, 謝辞有

中村元, 2025, 20世紀前期日本の地方測候所における地震の「管内観測」について, 第13回歴史地震史料研究会講演要旨集, 36-38., 査読無, 謝辞有

西山昭仁・石辺岳男・片桐昭彦, 2025, 近世佐渡における被害地震の検討, 第13回歴史地震史料研究会講演要旨集, 19-21., 査読無, 謝辞有

原直史, 2025, 1828 (文政11) 年複合災害情報の流布について—越後国を中心に—, 災害・復興と資料, 17, 21-34., 査読有, 謝辞有

原直史, 2025, 1828年越後三条地震における村上藩の対応について, 第13回歴史地震史料研究会講演要

旨集,25-30., 査読無, 謝辞有

原田和彦,2025,寺院日記・松代藩庁日記に見られる地震記事,災害・復興と資料,17,9-20., 査読有, 謝辞有

原田和彦,2025,地震と複合災害—飛越地震を中心に—,第13回歴史地震史料研究会講演要旨集,31-32., 査読無, 謝辞有

原田和彦,2026,1847善光寺地震—松代藩の史料にみる被害報告と復興策,信濃毎日新聞社,1-257., 査読無, 謝辞無

堀健彦・片桐昭彦,2025,「西川筋道上山付近絵図（断簡）」試論—地震によって引き起こされた液状化・噴砂との関係に注目して,災害・復興と資料,17,35-48., 査読有, 謝辞有

矢田俊文,2025,新潟県西蒲原郡の地図と潟—20世紀初頭—,災害・復興と資料,17,49-55., 査読有, 謝辞有

矢田俊文,2025,年代記「横越島旧事記」に関する一考察—1670年越後蒲原地震を中心に—,第13回歴史地震史料研究会講演要旨集,12-14., 査読無, 謝辞有

・学会・シンポジウム等での発表

片桐昭彦,2025,近世佐渡の年代記と地震—『佐渡国略記』を中心に,第13回歴史地震史料研究会,5.

齋藤瑞穂・鈴木正博,2025,仙台湾弥生土器編年と地震津波研究—仙台湾最古の水田経営と松島湾の繩文／弥生貝塚形成論—,第13回歴史地震史料研究会,1.

中村元,2025,20世紀前期日本の地方測候所における地震の「管内観測」について,第13回歴史地震史料研究会,11.

西山昭仁・石辺岳男・片桐昭彦,2025,近世佐渡における被害地震の検討,第13回歴史地震史料研究会,6.

原直史,2025,1828年越後三条地震における村上藩の対応について,第13回歴史地震史料研究会,8.

原田和彦,2025,地震と複合災害—飛越地震を中心に—,第13回歴史地震史料研究会,9.

矢田俊文,2025,年代記「横越島旧事記」に関する一考察—1670年越後蒲原地震を中心に—,第13回歴史地震史料研究会,4.

(9) 令和7年度に実施した調査・観測や開発したソフトウェア等のメタ情報:

(10) 令和8年度実施計画の概要:

令和8年度は,今年度に引き続き,地震・火山現象に関連する近代観測開始以前の史料を調査・収集し,新たな史料については翻刻を行う.災害絵図も収集し,絵図記載の文字の翻刻・トレース図の作成を行う.収集した史料のうち,総家数・倒壊家屋数・即死者数が記載されている近代的な観測データとの比較・検討が可能な良質の史料については被害表等を作成する.以上の成果をもとに歴史学・考古学・地理学研究者が共同で研究し,各歴史地震の新たな実像を提示する.そして,研究会の開催,および『災害・復興と資料』刊行によりそれぞれの成果を発表する.

(11) 実施機関の参加者氏名または部署等名:

片桐昭彦（新潟大学災害・復興科学研究所、同人文学部）, 矢田俊文（新潟大学人文学部）, 原直史（新潟大学人文学部）, 堀健彦（新潟大学人文学部）, 中村元（新潟大学人文学部）, 北村繁（新潟大学教育学部）, 森貴教（新潟大学人文学部）, 小野映介（駒澤大学文学部）, 齋藤瑞穂（神戸女子大学文学部）, 原田和彦（長野市立博物館）

他機関との共同研究の有無: 無

(12) 公開時にホームページに掲載する問い合わせ先

部署名等：新潟大学災害・復興科学研究所
電話：025-262-6542
e-mail：katagiri@human.niigata-u.ac.jp
URL：

(13) この研究課題（または観測項目）の連絡担当者

氏名：片桐昭彦
所属：新潟大学災害・復興科学研究所